

フォーラムニュース Vol.41 2022 8/25

発行：フォーラム・子どもたちの未来のために実行委員会

<http://www.f-kodomotachinomirai.com/>

文責：大竹永介

《Summer Essay 2022》

～復帰 50 年のオキナワから～

オキナワと児童文学と私 上條さなえ

★記録的に早い梅雨明けとともに来た猛暑、集中豪雨。参院選直前に起きた衝撃的な安倍元首相の狙撃事件とその死。そして参院選挙。いつものようにヒロシマ、ナガサキの日をそして 8・15 を迎えながら、今年の夏も終わろうとしています。新型コロナウイルスの感染はいっこうに収まる気配もなく、まるで災害列島のように各地で繰り返される大雨の被害、次々と明らかになる政治家と旧統一教会との関係と・・・日本の現状は混迷を極めていくようにもみえます。そんな 8 月に、沖縄に移住しながら作品を書き続けている作家の上條さなえさんに今の思いをつづっていただきました。（編集部）

~~~~~



沖縄に移住して 8 月末で 8 年目を迎えた。

以前児童文学に携わる方から、沖縄からなかなか児童文学が生まれないのは、何故だろうと、言われた事がある。実際に暮らしてみて、今なら、その理由のようなものが分かる気がする。おそらくそれは「言葉」の問題なのである。

沖縄の歴史は、太平洋戦争末期の沖縄戦だけを見ても悲惨で残酷で、人類史上からも稀にみる凄惨な出来事だった。生き延びた人々を待っていたのは、米軍統治による更なる収奪と収容所での生活だった。

その日々はいわゆる日本復帰まで 27 年を要した。

やがて、1972 年 5 月 15 日に米軍統治下だった琉球政府は、日本に復帰し、戦前に続いて 2 度目の沖縄県となった。

ただ県民が願った米軍基地の撤去は叶わずの日本復帰だった。

それから、50 年後の今、沖縄ではかつて日本政府に奪われた沖縄の言葉、「しまくとぅば」の復活が提起されている。

沖縄のことわざに、「うまりじまぬくとうば、わしりーねー、くにんわしりゆん」というものがある。これは生まれた島の言葉を忘れたら国のことも忘れる、という意味だと言う。

先日私は60歳の男性から那覇の小学校時代、方言札（編集部注：標準語を普及させる手段として、主に学校において、非標準語（地方言語、方言）の使用者に掛けさせた札のこと）を掛けられたという話を聞いた。戦前に行われていた悪しき行為が戦後も続いてきたと言う事実に、驚きを禁じ得なかった。

つまり、沖縄の人々は長く「しまくとうば」での会話をしてきたにも関わらず、日本語のヤマトぐちでの会話、文章作りを強要されたのだ。

自分の先祖が代々愛した言葉を捨てるという事が、どれだけ屈辱的であったか、想像するだけで胸が痛む。

私の知る児童文学を志す人々は、「しまくとうば」をこころから愛している。けれど現実には、県内、県外に拘わらず日本語でなければ子どもたちには伝わらないのだ。そうしたジレンマの中で歳月は過ぎていった。

沖縄から児童文学を生み出していくためには、その矛盾と困難と闘うということなのである。

「しまくとうば」、日本語、時として英語を使わなければ生活出来なかった沖縄の人々。

中には沖縄の民話にチャレンジして新聞社の賞を取った方もいる。「しまくとうば」が発表の場として最適なのは、民話かもしれない。ただ出版となると、短編だし、たくさんの注釈をつけなければ、子どもたちの理解を得るのは難しいだろう。

こんな中で私が何故ヤマトぐちで児童書を書き続けているか、その事もここに書こうと思う。

沖縄に移住してすぐに、こちらの新聞に辺野古新基地反対の住民に対して、排除するため、関西圏内から派遣された機動隊の若い男性が、自分の祖父母ぐらいの人に向かって、「土人」と言ったという記事が載った。私は子どもの本の作家としてひどくショックを受けた。

この機動隊の若い男性は沖縄の悲劇も知らず、今の現状も知らないのだろうと思ったからだ。考えてみれば、『白旗の少女』以降、全国の子どもたちに今の沖縄の子どもたちを描いた本があっただろうか。私は残念ながら、沖縄を支配し、米軍基地を押し付けてきた大和民族の一人、ヤマトんちゅである。その私に出来る事は、沖縄の歴史、今を生きる子どもたちを書くことだろうと思っ

たのだ。全国の子どもたちに「土人」でない沖縄の人々を書かなければいけないと、思ったのだ。

日本復帰の50年で沖縄の何が変わったか、確かなのは沖縄の子どもたちが、100%日本語を習得したことだ。日本本土の子どもたちとなんら、変わらないヤマトぐちを習得したのだ。

今60代から100歳までの県民が愛した「しまくとぅば」を、絶やしてはいけないが、それをどう子どもたちに伝えていくか重い課題がある。

出来るなら、しまくとぅばを愛する児童文学者の皆さんの作品を児童文学者協会などが記録してくだされば沖縄の矛盾に向かい合った人々の歴史を残すことが出来るのではないだろうか。



(かみじょうさなえ：児童作家。1950年生まれ。大学卒業後小学校教員を務め、1987年「さんまマーチ」でデビュー。主な作品に「コロッケ天使」「10歳の放浪記」「月と珊瑚」など。埼玉県の子童館館長、埼玉県教育委員会委員長などを歴任。2014年から那覇市在住)

### ★カンパのお願い

「フォーラム・子どもたちの未来のために」は実行委員のボランティアによって運営されています。無料のイベントも多いため、カンパのご協力を頂けると助かります。ご協力頂ける方は以下の口座までよろしくお願い致します。

さわやか信用金庫牛込支店 普通預金 0974742  
フォーラム・子どもたちの未来のために

●8月のフォーラムニュースをお届けいたします。以前、沖縄との交流を続けているフランス人から、沖縄の古くからの言葉は学校で教えられていますか、と尋ねられ、いいえ、と答えるととても残念そうな表情をされたことを思い出しました。フランスには実にたくさんの「地方言語」がありますが、学校できちんと教えている地方もかなりあるようです●先日平野啓一郎氏の「死刑について」(岩波書店)という本を読みました。死刑についてのご自身の考え方の移り変わり(簡単に言えば肯定から否定へ)をわかりやすく率直に語られた本ですが、その中に、日本では人権教育が「相手の気持ちになって考えましょう」式の「感情教育」に偏っていて個人が有する「当然の権利」としての人権についてきちんと教えられていない、という指摘があり深く考えさせられました●それは「人権」だけの問題ではないのかもしれませんが。(0)